「モーダル・パーソナリティと バーバル・コミュニケーションの関連性について」

—大分県の県民性と方言特性に関する心理学的考察—

高 橋 正 臣
Masaomi Takahashi

Abstract

In this research, the explication of the specific modal personalities of the people in Oita Prefecture, and the relationshjp between the modal personalities and the activities of modal varbal communication (the Oita district dialect) as the method of dairy communication are attempted to be verified.

As the result, the method of dairy communication through dialect is justified by the modal personalities, and there is strong connection between the personalities and the activities.

In the continuing research, selected dialect will be taken out in a systematized method, and comparative studies between languages and personalities shall be attempted.

I 研究目的

本研究は「人格形成を規定する要因分析」の継続研究の一環として行われたものである。前回の研究[1]『モーダルパーソナリティとその行動特性』においては、モーダルパーソナリティの存在と、そのモーダルパーソナリティがその有するパーソナリティに対応して、どのように個有なモーダルな行動特性を示すかを＜交通事故発生行動＞を通して明らかにしてきた。本研究では、特定のモーダルパーソナリティが、生活コミュニケーション手段としての＜方言＞というモーダルなバーバル・コミュニケーション行動とどのような心理学的関連性を有しているかを立証することを目的とした。

II 研究方法

1．モーダルパーソナリティの解明と把握

一般的に『モーダルパーソナリティとは，集団の大多数が共通してもっている最頻性格』と定義されている[2]。本研究では、従属変数として「方言」を設定している関係上、方言に対応する独立変数として可能な限り科学的に設定しうるモーダルパーソナリティとして「県民性」をとりあげた。この「県民性」の定義については、宮城音弥の「国民性」の定義に準じた[3]。宮城の『国民性』を『県民性』に置き変えてみると次のようになる。(　) 内は宮城。

『県民性（国民性）とは、第一に、県人（日本人）を何千人か選んで、その性格を調査する

と、もっとも多い性格特性がわかる。これが県民性（国民性）である。集団の大多数が共通してもっている性質をモーダル・パーソナリティ＜最頻性格＞というが、県民性（国民性）は県民（国民）のモーダル・パーソナリティである。統計を用いていない場合でも、経験的に県人（日本人）に多くみられる特徴を指摘することはできる。第二に、県（日本）には父祖代々、伝えられてきた生活様式がある。個人は、この中で育ち、その習慣を身につけていくのであるが、この生活の仕方が県民性（国民性）である。人間がつくり出し、世代から世代に伝えられてゆく生活様式を「文化」というが、県民性（国民性）とは、その県民（国民）の文化である。第三に、個人の行動に、怒りやすいとか、せっかちであるとかいう性格があるように、地域人（民族）にもきまった性格がある。これが県民性（国民性）である。』

上記のように宮城は県民性（国民性）を三つの視点からとらえているが、本稿においてもこの三つの視点に耐えうる資料を求めた。即ち、

(1) モーダルなパーソナリティとして「県民性」をとりあげたのは、科学的な信頼性・妥当性・客観性、並びに対応する従属変数としての「方言」のもつ特性からみても、「県」単位の地域限定が最適であると思われたからであり、本研究では「大分県」をとりあげた。

(2) 県単位（47都道府県）のモーダルパーソナリティについて、第一の＜最頻性格＞の統計的な科学的把握は、ぼう大な組織とエネルギーを要するため困難性が大きく、従来この種の研究は極めて少ない。ここでは、次の２つの資料に基づいているが、純粋に心理学的な資料としては、宮城の研究だけのようである。

1) 宮城音弥「日本人の性格・1977年」
2) ＮＨＫ「日本人の県民性・1979年」

(3) モーダルパーソナリティについての第二、第三の視点からの把握方法としては、次の資料に拠って大分県の県民性把握を行った。

1) 関祖衡「人国記・1701年」
2) 大宅壮一「日本人物鉱脈・1959年」
3) 高松光彦「九州の精神的風土・1977年」
4) 大分合同新聞社「われら大分県人一年間企画・1979年」
5) 狭間久・他「大分人の系譜・1985年」

２．生活コミュニケーション手段としての「方言」の把握について

「県民性」の意識的、無意識的な形成と伝達は、遺伝質なものを除けば、当然出生後の生活環境の中で行われる。従って、その間のコミュニケーション手段としての言語は、その地域の、その生活様式に、心理的にも生活的にも最もふさわしい、あるいはコミュニケーション上、情報伝達の速さ、正確さ、意味の微妙さ等において、最も効率的なものが用いられ、造成されたものである。そしてこれらの条件を満たすものが「方言」である。

更にその条件がより一層閉鎖的に地域化されればされるほど、その「方言特性」は顕著となり、その結果、話し手集団の共通意識感情は強固なものとなり、そこにまた一層の「住民性（県民性）」が形成されてくる。「県民性」が「方言」言語行動を生み出すと同時に、「方言」言語行動が「県民性」を生み出し、両者は完全に〝にわとりと卵〟の連鎖関係にあるといえる。

この「方言」即「県民性」ともいえる点からみて、県民性というモーダルパーソナリティ解明には、モーダルな言語としての「方言」はこの上ない従属変数となるのである。

(1) 大分県の方言のとりあげ方

かつては生活言語全てが方言であり、この全ての方言を網羅してとりあげることは不可能に近く、又本研究目的にとっても効率的ではない。つまり、大分県の県民性に対する要因を所有するとみなせる方言特性が把握できれば、目的は十分に達しうる。この点から、大分県の代表的方言とみなされてきたものをとりあげた。

(2) 大分県の代表的方言について

代表的方言の概念規定はかなり困難である。しかし、方言が日常の生活コミュニケーションの中から、長期にわたって形成された生活言語であることから、県民の間で、いつとはなく〝代表的〟とみなされてきた方言をとりあげるのが、最も妥当と思われる。その意味で、一見非科学的のようであるが、みやげ物の手拭いや、のれんなどに染めぬかれている方言「番付け」をとりあげた。最も代表的方言を＜横綱＞として、以下＜大関・関脇・小結＞と続くものである。この代表順位は、誰が決めたものでもなく、長い間にいつとはなく形成されてきた共通意識であり、方言のもつ特性からいえば最も代表的かつ科学的といってよかろう。

ただし、県代表の方言としては、やや地域に片よりすぎたり、余りにも廃語に近いものがある。従って、各地へのアンケート法による百数十の回答をまとめた、大分県の方言研究家・高田一彦氏「方言番付け」(後記) を用いた。

3．県民性と代表的方言の関連化

県民性と代表的方言の関連づけは、以下の手法によった。

(1) 高田の方言番付による大分県方言を、その語のもつ心理的特性によって類型化し（8群)、その心理的特性の特徴を求める。

(2) 前記宮城によってすでに統計的に類型化された大分県人の県民性（「気質」・「気性」）を基盤に、前回の研究では触れなかった県民性定義の第二、第三の概念（視点）によって明らかにされた大分県人の県民性と8群に類型化された方言の特性との関連づけを試みた。

III 結果とその考察

1．大分県の県民性（県民性視点第1による場合）

(1) 宮城の類型による分析

1) 宮城の類型・〔気質〕

宮城は生まれつきの感情意志的な行動様式としての「気質」をクレッチマーに従って＜分裂質・躁うつ質・てんかん質＞の三つに類型化し、それぞれの気質類型がもつ心理的特性の内容を次の表1、表2、表3のように説明している（これらの表は筆者が宮城の各気質の内容を表にまとめたものである)。

2) 宮城の類型・〔気性〕

次に幼児時代に生後の環境によってつくられる、やはり性格の基盤となると思われる性格領

表1　〔分裂気質〕

一般的性格	(A)	(C)
○非社交的 ○内　気 変りもの	敏感・神経質な傾向 ・気が小さい ・恥ずかしがり ・興奮しやすい	① 超 然 型（貴族型、高踏派型） 繊細な感情の持主でキズつけられやすい。ていねいで優しいが、よそよそしく冷たい。身を持ちくずす頽廃型は、この型と反対のようだが、この型の変形である。 ② 夢 想 型 空想の世界に生きる。 ③ 理想家型 冷い正義感をもち、道徳的にふるまうとともに道徳をふりまわす。利他主義者。この軽い程度のものが、きまじめ型。
○キマジメ	鈍感・はきはきしない傾向 ・鈍　感 ・従　順	④ 独 善 型 鈍感に傾き、他人の感情など考えない。他人が自分の考えとちがうことをゆるさぬ暴君。 ⑤ 不 満 型 周囲のことに不平をいいつづける。 ⑥ 鈍 重 型 お人よしで、世の中のことに関心がない。

※「一般的性格」は（A）、（B）の二つの傾向に分れ、（A）、（B）の混合によって（C）の6つの具体的な型に分れる。

表2　〔躁うつ気質〕

一般的性格	(A)	(C)
○社交的 ○親　切 ○善　良 ○温　和	陽気な傾向 ・陽　気 ・活発でユーモアに富む ・熱　烈	① 陽 気 型 朗らかで頭の回転がはやく、でしゃばりで遠慮がなく、生き生きしている。 ② 活動家型 よく働き、仕事を楽しむ（クレッチマーの精力的実際家） ③ 温 和 型 機嫌のよい、もの静かな人であって、とくに好気嫌に傾くタイプとユーモアに富む平静なタイプがある。
	(B) 陰気な傾向 ・陰　気 ・もの静か ・不活発 ・気が弱い	④ 陰 気 型 内向的で不安で憂うつに傾くが、ただ、友人との交際を嫌うわけではない。

※「一般的性格」は（A）、（B）の二つの傾向に分れ、（A）、（B）に＜活動＞面を加えて、具体的には（C）の4類型に分類される。

表3　〔てんかん気質〕

一般的性質 ○かたい	（A） 粘着の傾向 ・ていねい ・いんぎん
○きちょうめん	（B） 爆発性の傾向 ・怒りっぽい

※「一般的性格」は（A）、（B）の二つの傾向に分れるが、勿論他の気質の場合と同様、が（A）、（B）の両要素をともにそなえている。

域を次のように＜強気・勝気・弱気＞の三つに類型化している。

強　気

強気の人間は、我が強く、自分を他人よりすぐれた者と思い、自信満々で、負けじ魂を発揮し、困ったことがあると他人のせいだとみなす。

勝　気

勝気の人間は、外向的で、自分本位で虚栄心が強く、自分を実際以上にみせようとする傾向をもち、強気とちがって背のびをする。

弱　気

弱気の人間は、何をやっても十分だという感じがしない、という「不完全感情」をもち、不安になりやすく、劣等感を抱きやすい。からだのことを心配し、対人関係を気にし，事がおこると自分が悪いと思う。

3)　宮城によってとらえられた大分県の県民性分析

宮城の気質と気性によってとらえられた大分県人の性格類型は、

┌ 気質→「躁うつ質」型
└ 気性→「勝　気」型

である。因みに九州各県の県民性を類型化すると、表4のようになる。

表4によってもわかる通り、他の気質分野、他の気性分野にわたることなく、明確な性格特性をみせるのは、九州においては大分県と沖縄県だけである（ただし、沖縄県の県民性については、宮城は高知県と類似するという範囲にとどめてあり、純粋に単一気質と気性をもちあわせているのは大分県のみである）。

従って、ここで宮城のいう「勝気」気性について詳細に引用しておこう。

－勝気の原因－は何か。

①　心の内面に冷たい。非社交的な分裂気質をもちながら、表面が外向的で社交的な躁型の

表 4　九州県別性格類型

気性＼気質	分裂質	躁うつ質	てんかん質	はっきりしない
強　気	鹿児島 熊　本 沖　縄 佐　賀	鹿児島	鹿児島 熊　本	
勝　気	佐　賀	大　分		長　崎
弱　気	佐　賀			
はっきりしない		福　岡		

（下線県は、２領域以上にまたがっているもの）

要素をもっているときに、勝気を生みやすい。

勝気の人間は外向的で、社交的である。ユングは性格を外向性—内向性に分類したが、両者の極端なものをノイローゼに求め、外向性の典型としてヒステリーを、内向性の典型として精神衰弱（劣等感をもち、何をやっても十分だという感じのしないノイローゼ）をあげた。ヒステリー、つまりヒステリー反応は、勝気の性格者が困ったとき、または欲求不満をもったときに示すものであるが、これは外向性のノイローゼである。

勝気の人間には躁うつ質の躁型のような外向性がみられるが、同時に、分裂質の人間がもつ冷たさと敏感な性質が存在する。むしろ、この性質を補うために表面的の外向性を示すし、ときには芝居じみた行動をさえすると解釈できなくもない。

②　勝気の人間は情意側面の未発達という特徴をもっている。情操が十分に発達せず、意志が弱くてブレーキがきかない原始的な性格の者は勝気を示す。

弱い動物は自己を守るためのとくべつの能力をもっている。強敵に出あうと死んだフリをするものがあり、弱い犬が吠えるように、自分を強くみせようとするものがある。一種の偽態である。勝気はこのような偽態を示しやすい傾向に外ならない。—

大分県の県民性は、宮城によれば、遺伝質的には『躁うつ質』であり、乳幼児期に環境要因によって形成され、性格の基盤となる性格は『勝気』である。

宮城は大分県の県民性を上記の通り「躁うつ」気質の「勝気」気性と位置づけたが、総合的に次のように特性化した。

大分県の県民性は、［狭量・島国的・模倣的・悲観的・反抗的・素朴・豪放・ぶこつな・とっつきやすい・地味・非合理的・保守的］であると。

(2) ＮＨＫ全国県民意識調査による分析

ＮＨＫ世論調査所が、３年間の企画・検討を経て、1978年（昭和53年）に実施した、40項目にわたる質問紙法による『日本人の県民調査』[4]の調査結果に表れた大分県の県民性は次の通りである。

1) 40項目の質問の中で、大分県の％が、全国の平均％からの偏差値ランクが１、５（**偏差値65以上をランク５**、55以上をランク４、45以上をランク３、35以上をランク２、**それ以下をランク１**）であり、検定結果が有意な主要項目とその応答率をとりあげてみると、

① 第10問：『おだやかで変化のない生活がしたいと思いますか』

〝そう思う〟の応答率64％（全国平均70％）全国47都道府県中第47位。従って、おだやかで変化のない生活は余り好まない、県民性がうかがえる。

② 第10問Ｃ：『多少自分の考えに合わない点があってもみんなの意見に合わせたいと思いますか』

〝そう思う〟の応答率68％（全国平均73％）、全国45位。従って自分の考えと違う意見に余り妥協したくない、県民性傾向である。

③ 第15問：『今の世の中では，実力のないものがおいてゆかれるのはやむをえないことだと思いますか』

〝そう思う〟の応答率56％（全国平均63％）、全国45位。今の世の中では、実力のない者は，おいていかれるのはやむをえない、と思う傾向は少ない県民性である。

④ 第16問：『人間にはすぐれた人と、そうでない人とがいるものだと思いますか。それとも人間にはそれぞれ良いところがあってそのような区別はできないと思いますか』

〝そう思う〟の応答率27％（全国平均21％）。全国第２位。人間にはそれぞれ良いところがあって区別はできない、とみる意識傾向の県民性。差別意識のない、他者容認型タイプの県民性といえる。

⑤ 第17問：『人間には、それぞれ分に応じた生活があるのだから、あまり不満を持つべきではないと思いますか』

〝そう思う〟の応答率67％（全国平均73％）、第46位。人間を、分に応じた生活に規制したり，生活に不満をもつべきではない、という考え方には賛同しない傾向の県民性といえる。

⑥ 第21問のＥ：『今の世の中では、義理人情がすたれて暮らしにくくなった』

〝そう思う〟の応答率42％（全国平均47％）、全国41位。大分県では、義理人情はそれほどすたれているとは意識されていない。

⑦ 第24問Ｂ：『大分県の人びとのものの考え方には、他の県の人びととは違った特徴があると思いますか』

〝そう思う〟の応答率36％（全国平均45％）。大分県人は自らは、他県と異った県民性特性や行動特性をもつとは考えにくい、県民性を有しているとみられる。

⑧ 第26問：『東京には、人びとの夢を満たしてくれるような魅力を感じる』

〝そう思う〟の応答率12％（全国平均20％）、全国46位。東京にはさして魅力は感じてないようであり、この応答率は諸条件を勘案しても九州各県に比して最下位である。

⑨ 第26問Ｂ：『東京のものを何でも尊重しすぎる風潮がある』

〝そう思う〟の応答率38％（全国平均33％）、全国６位。東京のものを尊重しすぎることに対する批判精神はかなり強い県民性である。

⑩　第27問：『お住まいの市町村の政治に満足していますか』

〝そう思う〟の応答率24％（全国平均31％）、全国47位。つまり市町村の政治に不満の率は全国１位であり、この点にも大分県の県民性に、批判性の強さが存在していることがうかがえる。

⑪　第29問Ｆ：『国や役所のやることには従っておいたほうがよい』

〝そう思う〟の応答率41％（全国平均46％）、全国41位。国や役所への半骨意識がうかがえる。

以上のような資料結果に基づき、ＮＨＫ世論調査所は大分県の県民性について以下のようにまとめている。

『大分県人は、合理的で、自主自立・進取の気性が強い。そのためか、やや協調性はうすく、積極的で個人主義的な意識をもつものが多い。また反権威主義的で、批判精神も強い。国や役所の権威には反発し、地方政治への満足感も全国でもっともうすい。東京にも魅力を感じない。県人意識・郷土意識も全国で低いほうである』

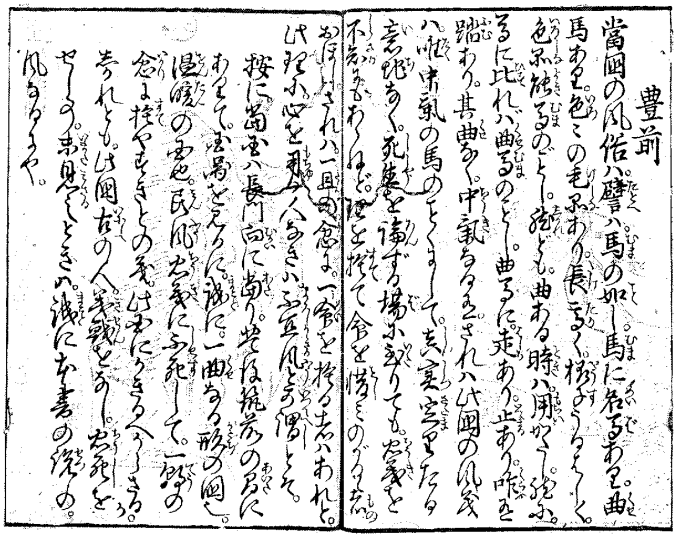
２．大分県の県民性（県民性第２、第３の視点による場合）

(1)　関祖衡の「人国記」[5] による分析

1701年、儒者・関祖衡によって著わされたもので、住民性の地域差を記述した資料としては最古の一つであると思われる。当時の日本全国66カ国の住民性を詳細、具体的に述べ、その時代の軍政地理学の書として、また江戸時代には各藩通商の書として珍重されたようである。

当時の大分県（豊前・豊後）の住民性について、以下のように「人国記」には記されている（図１～図４参照）。

図１



豊前

當國の風俗ハ譬ハ馬の如し馬に名馬あるを。曲馬あるを。色この毛ふかく長くして拗ようなるを。色ふ強なるを。強くも曲ある時ハ用やすく。強ふ。るに比れハ曲なるを。曲なるに走あり止あり。咋を踏あり。其曲なる。中氣なるをされハ此國の風俗ハ此中氣の馬のごとくして。表裏なきたる者多し。死生を論ずる場ふ到りても。義を不忘わるるなど。理を按て命を惜ミのごとくなるをされハ一旦の念より。一命を投る志ハ。われと。此理ふ心を用ふ人多きふ。是風俗の國と。

按に豊後ハ長一向に曲り。其ハ流芳の名に。あるを。豊前ハ強に。一曲なる形の國。

慢慢の面色。民俗ハ義に死して。一旦の念より按やすきしるの気。ハ此にうるへしる。

されとも。此國ハ人の人情とも。出死をせ。

の。事見てとき。ハ。強に女書の俗の。

風なるなり。

図2

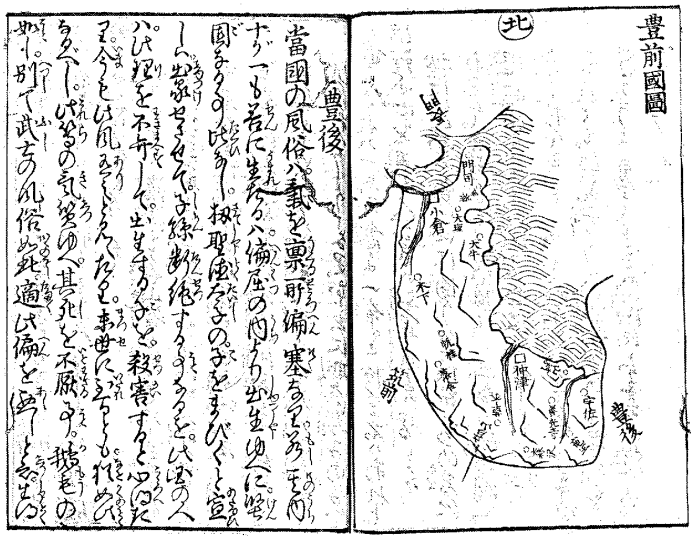


図3

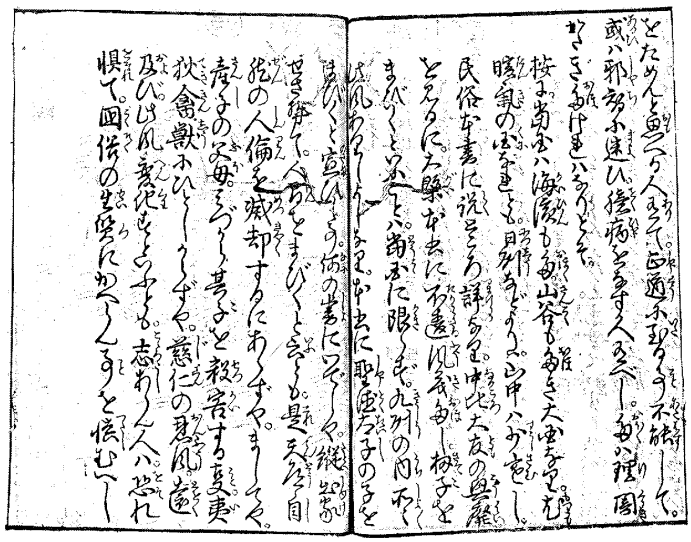
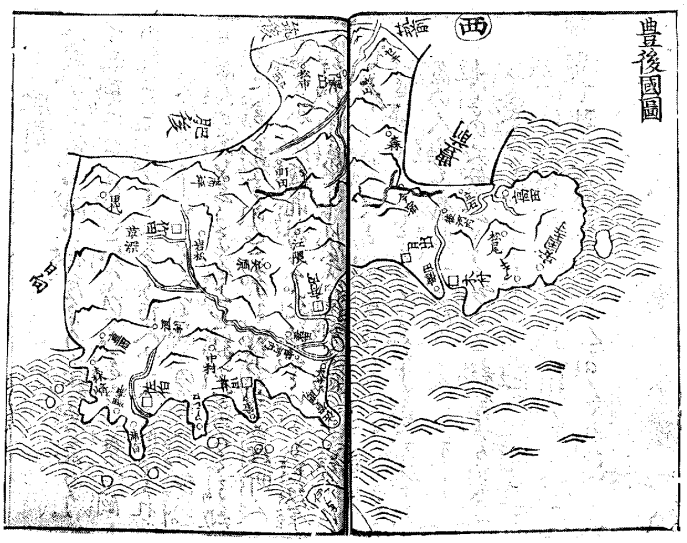


図4



［**豊　前**］の住民性について

『当国（豊前）の風俗は譬（たとえば）馬の如し。馬に名馬あり、曲（くせ）馬あり。色々の毛品あり、長（たけ）高く様子うるはしく、色品よき馬のごとし、然（しか）れども曲（くせ）ある時は、用いがたし。然（しかる）に、（豊前人を）馬に比すれば、曲馬のごとし。走るあり、止るあり、喰（くら）うあり、其曲（くせ）なく中気なるあり。されば比国の風義は唯中気の馬のごとくにして、真実定まりたる意地なく、死生を論ずる場に至りても、忠義を知らざるにもあらねと、理を捨てて命を惜しみのがれる者おほし。されば一旦の忿（いか）りに、一命を捨てる者はあれど、此理に心を用ゆる人なきは宜（よろし）からざる風と謂（い）うべしとぞ』

つまり関祖衡によれば『豊前の人間は馬にたとえれば、気まぐれの曲（くせ）馬か、中気（中風）の馬のようなもので、真実に基づく意地もなく、命を惜しむ余り忠義の理もわきまえず、かと思えば一時の怒りに理性を忘れて、命を捨ててしまう風がある。よくない風俗である』ととらえられている。

［**豊　後**］の住民性について

『当国（豊後）の風俗は、気をうくる所偏塞なり。もし其内十か一も善に生れたるは、偏屈の内より出生ゆえに、堅固なることは比（たぐひ）なし。さて聖徳太子の、子をまびくと宣（のたまり）しは出家させさせて、子孫断絶することなるを、比国の人は此理をわきまえずして、出生する子を殺害すると心得たり。今も此風ありと見えたり。末世に至るとも猶かくの如くなるべし。此等の気質ゆえ、其死を厭（いと）はざることが鵝（が）毛の如し。別して武士の風俗、かくの如し。適（たまたま）此偏を悪しと知り、生得をためんと思へる人ありて、正道に至る事能（あたわ）ずして、或は邪知に迷ひ、臆病をなす人あるべし。多くは理闇（くら）きかたぎ（気質）多ければなりとぞ』

つまり『豊後の人間は聖徳太子が出家をして子孫が断絶することを、子をまびくと言われたこの理を解せず、生まれた子を殺害することだと思っている。従って命を鵝毛の如く軽んじて死を惜しまない。事の理屈がわからない気質の人』ととらえられている。

数百年前の豊前・豊後（大分県）のモーダルパーソナリティである住民性評定は、九州他県に比して、かなり手厳しい評価がなされている。

例えば、隣県としての熊本県については［肥前］は『勇気ありて義を知りてひるむ色なし』であり、［肥後］は『武士の風俗は肥前に替りて柔かなり。然れども其意地，筑前豊前両国を合わせたるより上と知るべし』である。福岡県については、［筑前］は『勇も一応は勤むれども、かざる風ゆえ終（つい）に何事も成就せず』、［筑後］は『常に義理を談じ，得失を沙汰し費（ついえ）を慎んで、言語を飾る事鮮（すくな）し』と。価値的には豊前・豊後（大分県）より遙かに高い評価でとらえられている。［日向］（宮崎県）は『無体無法のことのほかおほい』と悪評されている。

いずれにしても、九州東海岸地域の住民性評価は低く、この傾向は瀬戸内沿岸地域についても同様のようである。

ともあれ、『人国記』に記された66カ国の住民性を、長谷川は現代の性格心理学の立場から、［温和型・潤達型・柔弱型・慎重型・偏狭型・野鄙型］に類型化して分類している[(6)]。これによると、大分県の県民性は［偏狭型］に分類化されている。

(2) 大宅壮一による大分県の県民性分析

評論家であった大宅壮一は、その著『日本人物鉱脈』[7]の中で、評論的立場から、大分県の県民性を次のように分析している。

『〝……大分県人はラテン系の中でもスペインに近いようである。情熱家が多いが、それに徹するものは少ない。がいして気まぐれである。熱血感ではあるが、うつり気である。純情で、詩情も豊かだが、その反面において打算的、功利的で、利害に敏く、ときには狡猾であり、無恥ですらある。激情に駆られることもあるが、冷めるのも早い。こういった性情は、白人の中ではスペイン人の多くに見うけるものである。

日本で〝南国〟というと、九州では鹿児島県、本州では和歌山県をあげるのが常識だが、鹿児島人には明るさが足りないし、和歌山人はせせっこましい。そこへいくと、大分県人に共通した性格は，何か夢を、ヴィジョンをもっていることである。その夢やヴィジョンが思う通りにいかないと、途中でインチキに変質することが多い点でも、スペイン人を想わせる。……〟』

大宅の大分県の県民性に関する分析は、宮城の統計的手法によって抽出された大分県人の気質・気性と非常に近似しており、また、300年前の関祖衡の記述とも、かなりオーバーラップしている。

(3) 高松光彦による大分県の県民性分析

九州各県の県民気質に、歴史と風土から接近したユニークな九州精神史への試みとして高松は『九州の精神的風土』[8]を著している。この著の中で、大分県の県民気質を、歴史、地理地形、風土と関連して前述の宮城の大分県の県民分析を引用した後に、次のように分析している。

『大分県民の総合的特長、意識の中で目立つものに＜連帯を尚ばず＞、積極的個人主義的傾向が顕著である。地域内は山地が多く、分離独立した狭隘な小社会が多く、経済的に貧しい風土のためであろう。地理的制約のため歴史的に、大藩がなく、小藩が分立し、各地域が文化、習俗、法制、社会構造、すなわち精神史的諸条件に相違がありすぎ、全域的にみると、自主独立的である。

独立不羈の大分的精神は、社会全体的に活力が旺盛で、＜おだやかで、変化のない生活をしたい＞と希望する人は、全国で一番少なく、多少、自分の考えに、合わないところがあっても、みんなの意見に合わせたい＞という消極的な人も非常にすくない。この結果、進取の気象には恵まれてはいるが、相互間の協調性がすくない。そのため、情熱的ではあるが、エゴイズムが存在し、孤立的で、大きくまとまることは困難な風土である。

大分県民が協同して徒党をなし、国権や県外大企業（大資本）を排撃するような行動様式を余りとらないため大分県民は権威、権力、国家権力に弱く、追従型の感じを受けることがある。確かに、大分県民には佐賀、熊本県民と異なり、前後の見境をかく「感傷的英雄主義」はない。国家権力であろうが、大資本であろうが、特に自分に対して損得関係がなければ受容れるのに抵抗はない。恬淡なのではなく、感傷的でないのであり、それは自分とて移入者（著者注：特に四国からの移入者が多い）であるからである。

政治に対する不満感、疎外感は強く、二世議員を無条件で受け入れるような協調性、権威主義はうすく、大分では二世議員は育たないといわれる所以である。』

高松は上記の大分県の県民性特性の各々について、具体例を挙げながら例証している。

(4) 高橋による大分県の県民性

さて、今までに引用した各資料にみられる大分県の県民性について、そのほとんどの特性が、やはりオーバーラップしており、大分県の県民特性が、かなり明確化されたと思われる。

高橋（筆者）はこれら各資料にみられる大分県の県民特性の各々について共通した特性を求めたところ、次のような共通要因がみられた。それは、『大分県の県民性は、いずれの性格特性も相対応する２つの極から成り立っている』ということである。この点は、大分県の人物論のエキスパートである、大分合同新聞社文化部長狭間久氏もすでに指摘している[(9)]。

例えば、「情熱的である」が「気まぐれ」であり、「激情的」だが「冷めるのも早く」、「変り身が早い」が案外「コツコツ粘り強く」、「忠義の理もわきまえないほど命を惜しむ」かと思えば「一時の怒りに理性を忘れて、命を捨ててしまう」のである。

このような相対応する二極の同時存在という「矛盾的自己同一」性が大分県の県民性の特徴であり、この視点から、前述した全ての資料による大分県の県民性を分析し、類型化すると次のようになる。

［大分県の県民性と＊1行動特性］

1) ┌ 熱しやすい積極主義型
　 └ 冷めやすい合理主義型
2) ┌ ＊2ヨダキーズム（大儀）型
　 └ アカネコ（働き手）型
3) ┌ 島国根性型
　 └ 順応性開放型
4) ┌ 権威依存型
　 └ 自由人型
5) ┌ 新しがりの好奇心型
　 └ 模倣型
6) ┌ ロマン願望型
　 └ 現実的・功利主義型
7) ┌ うつり気で変身型
　 └ ＊3四季的がんこ型

＊１　上記の２極対応の県民性の存在については、大分合同新聞社が年間企画によって解明した大分県人の行動特性事象[(10)]によって更に裏づけられたものであるが、本稿では研究目的の関係から行動特性事象の説明は省略する。

＊２　「ヨダキーズム型・アカネコ型」については[注10]を参照のこと。

＊３　「四季的がんこ型」とは、一端目標を設定したならば、何が何でもどのような障害にも屈せず、目標に達するための大上段にふりかぶった＜がんこさ＞というより、何かを始めた場合、あたかも四季が自然に廻りきたるように、いつの間にか時が過ぎて目標が達成され、客観的には＜がんこ＞にみえる状態をいう。

3．大分県の方言について

(1) 方言の概念規定

本稿においては、方言とは『一つの国語が地域によって異なった発達をし、音韻・語彙・文法の上で相違するいくつかの言語団に分かれるとき、それぞれの言語の体系をさしていう。なお社会の階層によって異なる言語を階級方言という場合がある』と規定しておきたい。

(2) 方言の心理的特性

特定の地域におけるコミュニケーション手段として用いられる高度のメディアは、生活言語としての方言である。そしてこの方言は、言語コミュニケーションのもつ2つの特性、①論理性、②感情性の伝達能力を最も効率的に具え、また具えるようにという必然性によって自然発生的に造られたものである。と同時に、地域における日々の日常生活に用いられるこの生活言語（方言）は、生活文化そのものとして、言語使用集団のモーダルパーソナリティを日々形成していくものと思われる。従って、方言の形成とモーダルパーソナリティ形成とは、相互に完全な連鎖反応的特性を有し、両者の相互関係の緊密性は絶対的とさえいえる。

(3) 本研究でとりあげた大分県の代表的方言

本研究では，方言とモーダルパーソナリティの関係解明の第一歩として、両者の最も心理的な連関の強いと予測される、方言の「語意」をとりあげた。「発音・アクセント」、「音韻変化」、また「語法」等については別の機会にふれてみたい。

前記「研究法」で述べた、高田一彦氏による大分県の代表的な方言は表5、表6の通りである。

この番付けは、昭和45年出版の高田一彦著「大分方言」[11]と、昭和46年「大分方言案内」[12]によるもの。

表5　大分県の代表的方言（高田一彦）[11]

	東	西
横　綱	よだきー（大儀な・おっくうな）	むげねー（かわいそうな）
大　関	めんどーしー（うるさい）	ずつねー（情ない）
関　脇	せせろしー（うるさい）	しゃーしー（うるさい）
小　結	しゃっち（しゃにむに）	なし（何故）
前　頭	おじー（恐ろしい）	だいー（だるい）
〃	いびしー（きたならしい）	せちー（切ない・きつい）
〃	ぞ(ど)ーくる（道化る・ふざける）	あばるる（あばれる）
〃	いれくる（ごまかす）	いらぶかす（だます）
〃	……きる（……ことができる）	……よる（……つつある）
〃	けしからん（たいへん）	いっこも（少しも）
〃	……だい（……だよ）	……せんせ（……しなさい）
〃	がまる（からかう）	おらぶ（大声を出す）
〃	いのちき（生活・なりわい）	ぶえん（生魚）
〃	あげな・こげな（あんな・こんな）	あじろしい(小気味よい・りっぱな)
〃	うっとう（私たち）	おいどう（おれたち）
〃	ふがいい（運がいい）	あばけん（入れものに入りきれぬ）
〃	かたる（加わる）	せらう（ねたむ）
〃	こずむ（つみ重ねる）	あらく（間があく）
〃	あど（かかと）	こけ（垢）

表6は、昭和46年アドバンス大分発行「大分あれこれ」に掲載された、高田一彦『大分方言案内』によるもの。この分類は、代表的方言を使用地域によって（大分県北部・大分県南部）対比させたもので、前記の分類を若干修正したようである。

表6　大分県の代表的方言（高田一彦）[12]

	北（部地方）	南（部地方）
横　綱	だいい（大儀な）	よだきい（大儀な）
張出		
横　綱	しきる（できる）	…しよる（……しつつある）
大　関	せちい（つらい）	ずつねー（情ない）
関　脇	むげねぇ（かわいそうな）	めんどうしい（はずかしい）
小　結	ぞうくる（ふざける）	がまる（からかう）
前　頭	しゃあしい（うるさい）	せせろしい（うるさい）
〃	いびしい（きたならしい）	おじー（おそろしい）
〃	なし（何故）	しゃっち（しゃにむに）
〃	いれくる（ごまかす）	いらぶかす（だます）
〃	けしからん（たいへん）	あじろしい（小気味よい）
〃	すもしれん（まるでつまらん）	すもつくれん（まるでつまらん）
〃	あばるる（あばれる）	おらぶ（大声を出す）
〃	せがう（からかう）	せらう（ねたむ）
〃	いのちき（生計）	ぶえん（生魚）
〃	かたる（加わる）	あらく（間があく）
〃	ふがいい（丁度運よく）	あばけん（入り切れない）
〃	ごてーしん（なまけ者）	だったへー（なまけ者）
〃	けっか（却って）	しるべ（知人）
〃	こけ（垢）	あど（かかと）
〃	……たなあ（ですねえ）	……じゃなー（…ですね）
〃	そうかい（そうですか）	そうだい（そうだよ）

(4) モーダルパーソナリティとしての「県民性」と、モーダル言語としての「方言」との連関性

代表的方言とは、長期間、また大分県全体あるいはかなり広範な地域において、日常生活の中で最頻的に使用されてきた日常言語であるとみなしうる。従って、このことばの背景には、これらの代表的方言を必要とするコミュニケーション、生活のあり方が存在し、そのまた背景には、この方言を生み出したモーダルパーソナリティが存在している。そして、このモーダルパーソナリティと、モーダル言語を生み出しこの両者を関係づけた要因が、地理・地形、気候・風土、歴史、経済であろう。

その意味から、代表的方言は、モーダルパーソナリティそのものであり、歴史、文化そのものであるといえる。

さて、高田氏による大分県の代表的方言（上記2表）を、その語意のもつ心理的特性によって類型化すると表7のように8群に類別され、その特性が実に明確となる。

表7　代表的方言の類型

（下線語は表1，表2の代表性上位5位のもの）

	代表的方言	左に類似した，かなりよく用いられる方言	類型特性
I群	よだきい（大儀な），だいい（大儀な） せちい（つらい），ずつねー（情ない）	だらまー（しまりがない，だらしない）	○消極的，怠惰的 ○泣きごと的
II群	ぞうくる（ふざける），がまる（からかう） せがう（からかう），せらう（ねたむ）	おこつる（からかう，あばれる） おちょくる（からかう，嘲弄する）	○外向的ちょっかい的
	あばるる（あばれる），おらぶ（大声を出す）	ちゅーかん（オッチョコチョイ）	○おっちょこちょい的
III群	しゃあしい（うるさい） せせろしい（うるさい）	せせらしい（うるさい） せせろしい（わずらわしい，うるさい）	○拒否的
IV群	いらぶかす（だます） いれくる（ごまかす）	ほげ（ほっぽ）（でたらめ）	○狡猾的 ○ペテン的
V群	いびしい（きたならしい），おじー（おそろしい） すもしれん（まるでつまらん），すもつくれん（まるでつまらん） ごてーしん（なまけもの），だったへー（なまけもの） あじろしい（小気味よい）	あらましな（いいかげんな） おろいい（悪い），くされ（意地悪） びったれ（だらしなく不潔者），びってー（きたない） うたちー（きたない，しみったれな） だっちょる（だれてる，疲れてる） さらばか（ばか）	○相手批判的 ○反発的
	けしからん（たいへん），いっこも（少しも） しゃっち（しゃにむに），なし（なぜ）		○相手詰問的
VI群	うっとう（私たち），おり（い）どう（おれたち） かたる（仲間に加わる），かつる（仲間に加える） …しきる（…できる），…しよる（…している）		○島国的・なわばり的 ○自己防衛的 ○自己顕示的
VII群	むげねー（かわいそうな） めんどしい（はずかしい）		○愛情的 ○羞恥的
VIII群	あど（かかと），こけ（垢），あらく（間があく） こずむ（つみ重ねる），いのちき（生計） けっか（却って），ふがいい（運がいい） あばけん（入り切れない）		その他

1）　大分県の代表的方言の一般的特性

①．I群の［よだきい・せちい］等、生活の中での〝大儀さ〟を厭う方言が代表的順位づけの第一位を占めている。

②．II群の［ぞうくる・せがう］等、ちょっかいを出して相手と競りあう、時にはこれが

おっちょこちょい的、あばれる状態までいくことを示す方言も多い。

③. III群では、II群を受けて、ちょっかいを出されて、[しゃあしい・せせろしい] 方言が生まれている。

④. ②、③の谷間で、自分の目標達成のためには、相手を、時には自己自身さえも、[いれくり・いらぶかす] ような語が生まれている。

⑤. その結果、[いびしい・すもしれん] 等、相手への反抗、批判を示す語が発生している。この種の語は、大分方言の中では相当大きな量を占めている。

⑥. VI群の [うっとう、おいどう] 等、自己顕示、島国的、閉鎖的、御一同様的方言もかなり多い。

2) 大分県の代表的方言とモーダルパーソナリティとしての県民性との関連に関する心理学的考察

第I群方言について

大分県の方言の中で、最も代表的といわれてきたものが、[**よだきー**] である。

この方言の語源は『よだけし＝ものうい・大儀である』(広辞苑) からきている。しかし方言としての『よだきー』は、〝ものうい、大儀だ、おっくう〟の意味以上にデレッとした気の進まない微妙なニュアンスをもっている。

○ [**だいー**] は、[よだきー] と並んで大分県の代表的方言であり、意味もヨダキーとほとんど同じであるが、ヨダキーが精神的な大儀さを、ダイイは肉体的な大儀さを意味しているようである。

○ [**ずつねー**] は、『術なし＝なすべき方法がない、苦しい・せつない』(広辞苑) を語源としているように思われる。ズツネーは、全国のいろいろの地方で、10以上の多くの意味をもって使われている (『方言辞典』による)。このうち、大分で用いられている意味は、〝せつない、気持が悪い〟であろう。

○ [**せちー**] は、『切＝ひたすら、せつい＝つらい、せつない＝つらい』(広辞苑) からきているようである。ズツネーとほとんど同じような意味で用いられているが、ズツネーは、〝どうしようもない情なさ〟、セチーは、〝きつくてつらい〟という意味の差はあるようである。

ともあれ、ヨダキー、ダイイ等の生活上のマイナス感覚的な言語は、どうような生活コミニュケーションの中から生じたのであろうか。このような方言を使用するモーダルパーソナリティはどのようにして形成されたのであろうか。

大分のヨダキーズムは、〝南国病〟の一つといわれている。即ち、温暖な気候風土にある大分は、平均年間気温は15.3度、4月下旬、10月上旬の気温で、人間の生活には最も適しており、気候変化にしまりがなく、これらの温暖な気候が、人間生活、考え方、ひいては人格形成に影響を及ぼすのは当然である。更に、この温暖な気候は適度の雨量、平穏な海とあいまって、人間がそれほど農漁業に手を加えなくとも、それなりの成長と漁獲を保証し、それほど厳しい管理をしなくても、食いっぱぐれることはなかったのである。このノンビリと生きる生活様式から生まれたモーダルパーソナリティの生活言語が『よだきー・だいい』であり、一寸した生活上の困難や抵抗に出合うと、ダイーから『ずつねー・せちい』となるのである。

躁うつ気質の＜よく働き仕事を楽しむ＞わりに、自分の気にそまなければ、ヨダキー、ダイ

イと感じ、善良な開放性と楽観性性格は、その体験感情を直ちにコミュニケーションの場でも外部へ言語表現させてしまうのである。

しかし、ヨダキーの背景には、あくまでも損得勘定を頭に置いた「現実」重視のパーソナリティが存在し、大分県人の「ヨダキーズム」は大分県の県民性基盤を構成し、県民性理解のキーワードの一つでもある。

第II群方言について

第II群は、第I群のヨダキー、ダイイの対極に位置する〝積極性〟の特質を帯びた方言である。しかも、対人関係における正面からの正々堂々と渉りあうのではなく、おどけて、相手にちょっかいを出し、からかい、うまくいかないと、あばれて、大声をだす、のである。

○ **［ぞうくる］**は、［よだきい］と共に、大分県の二大代表方言の一つである。語源は『道化る』である。ゾ→ドの転換が大分県方言には多い。例えば、「雑布（ゾーキン）→ドーキン」、「全然（ゼンゼン）→デンデン」等。「道化る（ドーケル）」が訛ってドークルになり、ドとゾのはっきりしない点から、ゾークルになったと思われる。方言辞典では「ドークル」で、大分・宮崎・熊本地方で用いられている。意味は読んで字の如く、おどける、ふざけるの意である。

これに類似した方言に、［ひょーぐる・ちゅうかん］がある。

○ **［ひょーぐる］**の語源は『剽軽る＝ふざけ、おどける』である。また**［ちゅーかん］**は『オッチョコチョイ・あわてもの・おてんば』の意。

更に大分県には、ゾークルに準じた代表的方言が、第II群をみてもわかるようにかなり多い。

○ **［がまる］**は、『からかう』の方言。［せがう］はやはり『からかう・いじめる』の意で、「せ（競）り合う」からセガウあるいはセラウ（ねたむ）にもなり、せり合うようにねちっとくっついてからかうからきている[11]。

○ **［おこつる］**の語源は『おこずる（誘る）＝だます、おびきだす・からかう』(広辞苑)からきており、大分方言としては、だまし、いびりながらからかうの意で用いられている。［いびる］も『からかう』の意で使用されている。

さて，第II群の方言は、二つに分類される。

① 一つは、［ぞうくる・ひょーぐる・ちゅーかん］に代表される方言である。つまり、自らが主体となっておどけ、あわて、ひょうけて、ふざけ、最後にどうしようもなくなると、あばれ、おらぶという、躁うつ質の開放型気質と、いささかオッチョコチョイ的な背のび式、線香花火的勝気気性が、余りにも如実に表現された方言グループである。

② その二つは、逆にひょーきんものの対象者として、相手を［がまる・せらう・おこつる・おちょくる・いびる＝からかい、せりあい、ねたみ誘き出し、なぶり、いびる］という方言タイプである。このタイプの方言は、躁うつ型の「うつ」タイプの一端を示すと同時に、九州一円にその家柄と勢力を400年間にわたって誇った大友氏の終熄、即ち豊臣秀吉、徳川家康による小藩分立（1593年）以来の、これまた400年間にわたる歴史的背景から生じた＜島国根性＞そのものの表われといってもよいであろう。

しかも、このタイプの方言が示すように、自分は、一見アウトサイドにいて、自己の損得を勘案しながら、猫がねずみをいびるように、相手に〝ちょっかい〟を出すのである。

大分県民は、かつて「豊後のあか猫」と評されたことがある。高松光彦によれば〝赤猫とは泥棒猫のことであり、変り身の早い油断も隙もならない見下げ果てたもののことである。この地（豊後）の人びとは、政治的に中央に対して無節操とも思えるほど変り身が早く適応する特徴をもち、術策を弄し約束を守らぬ、老猫の如き危険な人種と思われた〟[8]のである。

また豊後の住民性を酷評した前述の関祖衡が、その著『人国記』を出行したのが1701年であり、小藩分立後約100年を経ている。小藩分立前は勿論、その後江戸末期まで豊後は、当時の日本における〝南蛮貿易の拠点となり、切支丹文化の一大中心となり、南蛮文化とともに京都文化の流入により、この地方の文化・経済の中心的都市の立場をしめ、瀬戸内海の海運は物流の重要幹線として存在し、徳川末期までその地位は揺がなかった。〟(高松・前掲書)のである。

つまり、当時の豊後の人びとは、日本の西洋文化、日本文化の最先端を担い、西日本経済の重要拠点を掌握していた、すばらしい文化人のはずである。にもかかわらず、関祖衡は当時の豊後人を何故このように酷評したのであろうか。それは豊後人が現実、そのような住民性を示していたか、そのような悪印象を与えるような住民性をもっていたとしか思われない。

因みに大分県人に関する『アカネコ』語源説については、「旧藩・臼杵説」もある[12,9]。この説によると「ヨダキーズム」が「働きズム」をやっかんでその悪口として生まれてきたもので、むしろ〝アカネコ〟自体は悪くないという見方をする説である。

ともあれ、II群の方言のもつ性格特性から分るように、これらの方言のいずれも、相手があり、この相手に手を出すことである。しかもこの手の出し方は、ちょっと手を出しては、相手がそれに応じてどのように反応するかを見極めた後に次の手を出す、といった具合に、情報の収集と情報源へのフィードバックを、合理的・現実的にくり返し、その合間に適当な操作（手を出すこと）を加えるのである。そこには、小藩分立によって分離独立させられた狭隘な小社会の中で、生活適応のために常に周囲に触手をのばし、また他の小藩との間では連帯を拒んできた生活態度と、その結果生じた、好奇心による新しがり屋、自主独立、進取の気性、ひいては非協調性が生みの親として存在した歴史性がうかがえるのである。

第III群方言について

第III群に属する代表的方言は、II群の「道化たり、からかわれたり、ふざけられたり」することに対応する方言である。

○ **［しゃしい］**は『せわしい』から出ている。吐きすてるようにいわれる方言である。この〝シャーシイ！〟には、単にうるさいネということだけでなく、うるさくてたまらない状態を手で払い捨てるような、強い独得のニューアンスが感じられる。

○ **［せせろしい］**は『せせる・こせこせする』(広辞苑) から出ており、せかせかといつまでもうるさい時に用いられる。ほとんど同義語として**［せからしい］**がある。これは『せかせからしい』から出ているようである。他の類似語には**［せせかましい］**がある。これは『せせかし＝こせこせしている』から生じたようである。

このような第III群の方言が代表的方言となるについては、環境条件がそれほどにこの方言を生み出す状態であったことを物語っており、前記第II群の方言状態がいかに強烈であったかが推測できる。と同時に、躁うつ気質のもつ、〝忙がしい、忙がしい、うるさい、うるさい〟といいながらも、仕事を楽しむ行動特性や、子どものまといつきに対して、〝シャァシイ、セセロ

シイ〟といいながらも、対人を常に意識し、対人接触をどこか楽しんでいる社交気質が、この方言には内在していることがよく理解できる。

第IV群方言について

お互いセガイ（からかい）あい、干渉しあって、シャァシイ（うるさい）といいながら、両者がうまくいかないと、目標達成のために、からかいあいながら相手をだますのである。これから生まれたのが第IV群方言である。

○ ［**いらぶ（び）かす**］は、相手をだます、ペテンにかける、という意味で用いられている。語源は『からかう、愚弄する』(方言辞典）と『いららがす（苛す)』とがある。いずれもからかったり、相手をいらいらさせてだますのである。

○ ［**いれくる**］の意味は『ごまかす』であるが、語源は余りはっきりしない。『入れ繰って』ごまかすともとられ、しかもだますだけでなく、物的損害を与えることば[11]でもある。

○ 一寸変わったものに［**ほげ・をいう**］がある。[ほげ（ほげほっぽ）＝『でたらめ・口から出まかせ』] をいう、ということである。苦しくなると、ホゲをいうわけである。あるいは背のびをして自己を顕示してよくみせようとしてホゲをいうわけである。

代表的方言の中にこれらのことばが入っていることは、研究方法で挙げた県民性に関する全ての資料に共通して含まれている大分県の県民性特質が、「変り身が速くて狡い」ことであることを考える時、生活言語の持つ概念背景の深さは驚くばかりである。

第V群方言について

第V群方言は、一つはイラブカサレ、イレクラレる相手に対する批判的な性格評価の形容語がほとんどである。いま一つは、相手批判を超えて、相手詰問語である。

① 前者に属する方言は、

○ ［**いびしい**＝『いやらしい、きたならしい、気味の悪い』]、[**すもしれん**→「素性も知れない」・すもつくれん→「巣（酢）も作れん」＝『まるでつまらない』]、[**おじー**→おぞい＝『おそろしい』]、[**ごてーしん**→「御大身・五体死に」[11]＝『なまけ者』]、[**だったへー**→「だった（疲れた・だれた)」＝『なまけ者』]。

○ ［**あじろしい**→「味なこと・味らしい」＝『立派だ・できがよい』]。

批判的な代表方言に類似してよく用いられる他の方言は非常に多い。[**あらましな**＝いいかげんな]、[おろいい＝意地が悪い]、[**くされ**＝意地悪]、[**びったれ**（びってー）＝だらしない不潔者・不精者]、[**さらばか**＝大馬鹿]。

② 後者に属する方言は、

［**しゃっち**＝『しゃにむに・わざと』]、[**いっこも**→一向に＝『少しも…しない』]、[**けしからん**＝『大変』・悪い意味、いい意味両方に使用]、[**なし**＝『なぜ・どうして』]

批判精神旺盛で、自己主張を行い、それによって自己防衛を強く行う勝ち気気性は、生活言語の中では、相手をくさし、批判し、悪くいうことが必要である。さらに、〝ナシ（何故）シャッチ（そんなにしゃにむに）そんなことをするのか！〟、と相手を詰問するわけである。大分県人の協調性のうすさを示す、代表的方言であろう。

ともあれ、これほど相手への批判、詰問方言が多いのに、相手への賞め言葉は、一般的にも非常に少なく、代表方言の中では、わずか一語のみであり、大分県の県民性は相手を賞めることを知らない、といってもよかろう。

第VI群方言について

第VI群の方言は、第V群に続く、自己顕示・自己主張や積極的で個人主義的意識の強さを表わす方言である。[**うっとう**＝『わたし・わたしたち』]、[**おいどう・おりどう**＝『おれたち』]、[…きる＝『…できる』]、[**かたる・かてる**＝仲間に『加わる・加える』]。

自己顕示、自己主張の強いものは、言語表現の場合、どうしても〝私が、私が！〟という表現が多くなるのは当然である。その意味で、オイドウ・ウットウという方言が、大分県の代表方言となっているのは、大分県の県民性を十分裏づけている。

また、〝そんくらいんこたぁ、シキルど！（それくらいのことは出来るよ）〟と、自分を売りこみ、顕示し、主張する言語も、当然、代表方言の位置を占めているわけである。

なお、自分がどういう位置の仲間にカタル（加わっている）か、どういう仲間を自分のテリトリーにカテル（加える）かも、自己顕示の重要なプレスティッジを明らかにする手段である。これまた代表的な自己顕示的・閉差的な仲間意識的代表方言であり，勝ち気気性の面目躍如たるものがある。

第VII群方言について

第VII群の方言は、これまで述べてきた大分県方言の中では、いささか異質的と思われる。

即ち、第Ⅰ群からVI群までの代表方言にみられたものは、どちらかといえば生活感情面では相手への思いやりを欠くマイナス雰囲気を示すものであるが、第VII群は、プラス雰囲気を有している。

[**むげねー**→むげなし（仏性の無い）・無下なし（下が無い・大言海）＝『かわいそう』]、[**めんどしい**＝『恥かしい』]。

この二方言とも大分県方言としては、代表性のトップランクである。大分県の代表方言（本稿でとりあげたもの約50語）の中で、わずかこの２語と、第５群の相手への賞めことば１語『アジロシイ』が相手への思いやり、いたわりを示すが、この３語が代表方言に入っていることは、いささか救いであろう。

さて、大分県の県民性と（代表的）方言を分析し、その関連性を求めてきたが、方言が生活コミュニケーションから生まれたものである以上、生活を営むパーソナリティを反映するのは当然であるが、大分県というモーダルな面からみても、これほどに密接な相互の特性上の関連性を有していたことは予想を超えるものであった。

ただ、「躁うつ質・勝気気性」という大分県の県民性が、その一般的心理学的特性を基盤にしつつも、やはり生きていくための適応という面から、地理・地形、気候・風土、歴史、経済、文化等の影響、特に小藩分立後の生活経済の影響による生活態度・生活様式の規定を受け、この結果、生活言語も、「躁うつ気質」のもつ、他人同調型のおおらかで頭の回転の早さ

と自己顕示、移り気傾向を示す方言特性は勿論であるが、それ以上に、他者批判的、攻撃的、ひねくれ的特性［生後形成の勝気気性］が優位なものとなっている。400年前関祖衡が、大分県人を『曲（くせ）馬』と評した心情も十分理解できるようである。

Ⅳ 結 び

本研究では、大分県の県民性という特定のモーダルパーソナリティの解明と、このモーダルパーソナリティが、生活コミュニケーション手段としての「方言」というモーダルなバーバル・コミュニケーション行動とどのような関連性を有しているかの検証を試みた。その結果、両者の関連性の緊密さの強さはもとより、県民性特性が方言特性をそのまま裏づけていることが解明された。

今後は、代表的方言の抽出方法の厳密化と、他県との対比を通しての本研究の深化を試みたい。

引用文献

注１：高橋正臣「人格形成を規定する要因分析（Ｖ）―県民の気質類型と行動特性―」・大分県立芸術短期大学研究紀要第25巻1987年
注２：平凡社「新版・心理学事典」・1981年
注３：宮城音弥「日本人の性格」・東京書籍1977年
注４：ＮＨＫ世論調査所編「日本人の県民性―ＮＨＫ全国県民意識調査」・1979年
注５：関祖衡「人国記」・1701年
注６：長谷川貢「県民性―人国記にみる」・教育心理11号1957年
注７：大宅壮一「日本の人物鉱脈・1959年
大宅壮一全集第十一巻・1982年」・蒼洋社
注８：高松光彦「九州の精神的風土」・葦書房1980年
注９：狭間久・他「九州コスモス大分人の系譜」・1985年
注10：大分合同新聞社「われら大分県人―年間企画」・1979年
注11：高田一彦「大分の方言」・1970年
注12：青木繁「県民性を考える」・1969年